

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業（総合研究報告書）

MSM の HIV 感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究

ロジックモデルを用いた CBO による HIV 啓発活動のプロセス評価  
CBO による MSM を対象とした HIV 予防啓発活動のプログラム評価 -

研究分担者：本間隆之（山梨県立大学看護学部 講師）

研究協力者：荒木順子、佐久間久弘、木南拓也（公益財団法人エイズ予防財団/特定非営利活動法人 akta）、阿部甚兵、大島岳、柴田恵（特定非営利活動法人 akta）、岩橋恒太（名古屋市立大学看護学部/特定非営利活動法人 akta）、請田貴史、川本大輔、北村紀代子、辻潤一、狭間隆司、橋口卓、牧園祐也（非営利団体 Love Act Fukuoka）、後藤大輔、町登志雄、中村文昭（財団法人エイズ予防財団）、岳中美江

### 研究要旨

研究目的:MSM の HIV 感染予防対策として Community-Based Organization(以下、CBO)が実施しているコミュニティに向けた予防介入プログラムの記述による評価と検討を行うとともに、評価方法及び評価体制に関する検討をする。

研究方法:CBO がコミュニティに向けて行っている HIV 予防啓発介入活動の一部のプログラムを取り上げて、当該 CBO のスタッフを中心とした参加者によるワークショップを複数回実施し、プログラムの活動や目的、期待される結果などに関する意見交換を行った。一般的なプログラム評価論と米国 CDC の評価フレームワークを参考にしつつ、プログラムの記述にはロジックモデルをツールとして用いてプログラムを整理して記述を試みた。対象 CBO とプログラムは、NPO 法人 akta ;アウトリーチ活動、Love Act Fukuoka(以下、LAF); コミュニティペーパー「season」、MASH 大阪 ; コミュニティスペース dista (以下、dista) であった。

結果: プログラムの記述 : 3 つの CBO の 3 つのプログラムについて、プログラムの記述による評価を行った。akta によるアウトリーチ活動は、当該コミュニティとの信頼を含む関係性の構築と保持が活動の根幹にあることが明確になり、それを目的とする活動がアウトリーチ活動に内包されていることが記述された。LAF によるコミュニティペーパー「season」は、個人に向けて HIV/STD の共有、LAF やコミュニティセンターhaco の情報を提供するとともに、地元のイベント情報等を掲載し、個人に対しては HIV/STD に関する効果的な情報提供と同時に、街の情報誌として情報を媒介する機能を併せ持ち、haco(LAF) がコミュニティの一員としての役割を示すと同時にコミュニティからの信頼を得ることを意図していることが記述された。MASH 大阪による dista は、HIV が特別と思わなくなる、コミュニティで HIV/STI の話題を話すことができるようになる、自分で考えて情報を求め得る、自分で考えて検査を受検する、自分で考えて相談する、医療や検査相談などの社会資源が身近になり利用できる、コンドームを使う、自分らしく居られる場所があるといった要素が MSM における HIV 予防には重要であるという考えのもとに、dista を運営していることを明確に記述した。さらに、対象の定義を明確にした。 評価方法論の検討 : CDC のフレームワークを基にしたロジックモデルを用いてプログラム全体をシステムティックにかつ詳細に記述することによって、プログラムが意図する結果（目的や目標）と構成要素（資源や活動など）を明確にすることができた。

考察： プログラムの記述に関して、プログラム評価を行うことによって、各ステイクホルダーに有益な情報が整理されると同時に、一見しただけでは理解し得ない複合的な目的をはらむ活動を明確に記述することができた。ステイクホルダーは CBO のスタッフ、ボランティアや街の人を含む周囲の人、研究者、行政、関連 NGO などであり、それぞれプログラムの改善、理解、評価指標の設定と評価、類似活動との比較などの意味においてプログラム評価が有益な情報をもたらした。また、参加者が目的や活動を振りつつ他のスタッフとコミュニケーションを行い、一つのモデルを作り上げるといったプログラム評価の過程において、関係者間の理解や目的の違いを認識しつつ、CBO としてのある目標へ向かう活動であることを、再確認することに寄与した。 評価方法論の検討に関して、効果評価（アウトカム評価）を行う以前に、先のステイクホルダーを明確にすること及びプログラム全体を形あるものとして明確に記述することによって詳細に理解し合意形成を行うことができる。それによって初めて、妥当なプログラム評価の実施が可能となり、共通の理解視点を持って戦略的なプログラムの改善と運営を行うことができるようになる。評価理論を実際に応用する際に、各 CBO による想像以上に複雑なプログラムを解きほぐし整理しつつ記述することに苦慮した。より簡易かつ迅速に、必要十分な評価結果を得ることができるよう、CDC フレームワークのアレンジと手法の開発が必要である。MSM に訴求力のある HIV 予防啓発を行う CBO が CBO としての介入を行う上で、コミュニティから受容されるピア性の維持、信頼関係の構築と維持が基板となっていた。これらの属性は CBO が必然的にかつ永続的に有するものではなく、意図的に維持する取り組みを行うことが重要であり、これに失敗すると、CBO の最大の特徴であるメッセージの訴求力を失う可能性があることが推察された。また、これまでのサーベイによる結果評価において、介入曝露群と非曝露群の分類に使用していた CBO やキャンペーンのロゴの認知と介入曝露の程度は単純な相関ではないと考えられる。コミュニティにおける CBO やその活動への信頼や人気・支持といった指標が CBO としてのそもそもの効果に反映することが推察された。

結語：CBO による HIV 予防啓発の評価は、HIV 罹患率の減少や AIDS 報告数の減少といった長期的な中長期的な成果を待つ前に、プログラムの体系的な理解と、それによる活動プロセスの評価指標により、プログラムプロセスをモニタリングし、より効果的なプログラムへと迅速に改善をしつつ進めていく必要がある。

## A. 研究目的

### 1. プログラム評価研究

近年の公衆衛生学領域における研究の進展によって、解決すべき課題に関連する要因は多岐にわたり、課題として表面的に表れている事象との関連を含めて要因に関する非常に複雑な理解が必要になっている。これにともない、課題解決に向けて展開されている予防介入プログラムも複雑性を増している。HIV 予防領域においても同様であり、HIV 抗体検査受検行動や感染予防行動あるいは感染リスク行動に関連する要因は、生活地域や

属している文化など対象の属性によって異なると考えられているため、個別性の高いアプローチが求められている。日本における MSM に対する予防啓発対策の主軸となっている Community-Based Organization (以下、CBO) による HIV 予防啓発活動は、コミュニティセンターを中心として、当該コミュニティの「内」から予防啓発活動を行っている。CBO は、属するコミュニティの流行や雰囲気の変化を迅速に把握するとともに、コミュニティの人々に受け入れられ、伝わる予防啓発

介入を展開しなければならないため、多種多様な取り組みを日々改善・修正を加えながら年間通して継続的に展開している。

一般的な健康教育啓発介入研究で行われる事前事後デザインや対照群を設けた比較試験などの結果評価手法を単純に応用することは極めて困難である。この状況において、適切なプログラム評価と評価結果の活用を考慮すると、CBO がコミュニティやその文化をどのように理解し、どういった戦略で HIV 予防啓発プログラムを展開しているかに関する理解を行うことは、評価者にとって最も重要かつ急務であるといえる。

理念はスタッフの交代や時間の経過とともに薄まっていくあるいは意図せず変化することがある。関係者が個々に持つ表現されていないプログラムに関する認知を具体化して共有することは、一貫したプログラムの継続的運営に重要な意味を持つ。また、状況に応じたプログラムの改善のための適切な評価を行うためには、プログラムとして CBO が行っている活動とその期待される結果が明示されたプロセスを記述したうえで、体系的な評価を構築する必要がある。

## 2. プログラム評価

プログラム評価の定義は、「特定の目的を持って設計・実施されるさまざまなレベルの介入活動及びその機能についての体系的査定であり、その結果が当該介入活動や機能に価値を付与するとともに、後の意思決定に有用な情報を収集提示することを目的として行われる包括的な探究活動(安田, 渡辺 2008)」がこの場合もっとも適している。プログラムの体系的な評価には、一般的にプロセス、アウトカム、コスト、比較優位性、一般化可能性という価値側面があり、これらを統合した評価視点として妥当性、有効性、効率性、持続可能性がある。(財務省「政策評価に関する基本計画;平成 22 年一部改訂」では必要性、効

率性、有効性、公平性、優先性としている)。

これまで研究班で行われてきたクラブ調査や GCQ などのコミュニティ一般を対象に質問票調査を実施し、介入に曝露された群の特徴を記述することはアウトカム評価にあたる。これは対象の変化からさかのぼって、実施している活動特定せず一般的に意味づけする取り組みである。一方、活動内容自体とその目的を記述することによってプログラムを意味づけし、可視化する試みがプロセス評価であると言える。いずれにおいても実態として記述することが難しいプログラムの存在と対象の変化を可視化し意味づけすることが主たる評価研究の目的であり、本研究も同様である。

プログラムの効果評価のために質問票調査などのアウトカム評価を利用する場合であっても、プログラム実施によって対象にどういった効果(変化)が現れると期待されるのかについて、プログラムの目的から考えられる仮説でもよいので想定しておくことは、評価の観点から大変重要である。効果を表す指標の測定漏れを防ぐことに加え、この想定によって、得られた分析結果を恣意的に解釈することを避け、プログラムが意図した変化が表れているかに関して、適切に効果評価を行い、活動の改善に向けた知見を得ることができる。プログラム評価の重要な役割の一つは、活動に直接参加するあるいは間接的に関わる人々(ステークホルダ)の一致した見解のもとで、この期待される効果を想定・設定することにある。

## 3. ロジックモデル

米国ワシントンの政策シンクタンク Urban Institute の J.S. Wholey が 1979 年に記述して以来、プログラム企画、実施、評価を行うためのツールとして、経済や政策評価の分野で使われてきた [Wholey, 1979] [Bickman, 1987] [Chen&Rossie, 1983]。ロジックモデルはリソースと活動、期待される結果及びプ

ログラムに潜在的に含まれる理論を、マップのように視覚的に表現する手法である [W.K.Kellogg Foundation, 2001] [United Way of America, 1996]。コミュニティ参加による主体的取り組みによってロジックモデルはよりコミュニティにとって活用可能なものになると言われている [SA Kaplan, 2005]。

4. 評価枠組みの利用、ロジックモデルの活用  
行政レベルでは米国会計監査院 US General Accounting Office、イギリスの National audit office、カナダ Treasury board secretariat Canadaなどでプログラム評価実施マニュアルにおいて、ロジックモデルの概念、活用方法等の説明がある。また、非営利組織では、米国の W.K.Kellogg Foundation や United Way はロジックモデルを活用するためのガイドを作成し、助成金の申請に要する計画書に含めることとしている。

特に HIV/STD 予防の分野においても米国 CDC や 米 国 心 理 学 協 会 (American Psychological Association)において、ガイドラインや書籍の中で、HIV 予防プログラムの評価手法としてロジックモデルの使用を紹介している [Chen, 2005] [CDC, Evaluating CDC-Funded Health Department HIV Prevention Programs, 2007] [CDC, Evaluation Guidance Handbook: Strategies for Implementing the Evaluation Guidance for CDC-Funded HIV Prevention Programs, 2002] [Aral SO, 2008]

本研究においても CDC 's Framework for Program Evaluation in Public Health 及び Introduction to Program Evaluation for Public Health Programs を参考に CBO によって行われている予防介入プログラムの評価を試行する。ロジックモデルをどこまで詳細に作るかは、誰がそれを何のために使用するかによる。ロジックモデルを用いてプログラム記述することにより期待される効果は主

に以下の5点である。

- 1) 作成過程で議論することにより、CBO スタッフ及びボランティアなどのプログラム関係者が個々に考えている活動の目的や期待する成果について、整理(統合)できる。
- 2) 問題の発見や課題の整理、プログラム見直しの方向性などを考える際のツールとなる。
- 3) 新しく活動に参加しようとするボランティアや同様の活動を行おうと考えている他地域の CBO あるいは行政や出資者等に、プログラムを説明するためのツールになる。
- 4) 世代や主要メンバーが交代してもプログラムの目標を維持できる記録となる。
- 5) 活動の効率や効果などのインパクト評価を行うためのベンチマーク指標(調査項目)を設定する際の根拠資料となる。

#### 5. プログラムの記述

プログラムの記述には下記が必要とされる。

1.Need	プログラムが扱う課題は何か。
2.Targets	その課題に関して変化や行動を期待する集団をどう定義するか。
3.Outcomes	対象にどのように変化を期待するか、どのような行動を期待するか。
4.Activities	対象の変化を起こすために何を行うか。
5.Outputs	プログラム実施によって、具体的にどのような成果が生じるか。
6.Resources/ Inputs	活動がうまく進むためにはどのような環境や資源が必要か。
7.Relationship of Activities and Outcomes	どの結果を生み出すために、どの活動が実施されたのか。この STEP においてロジックモデルの使用が効果的である。

これらのことを検討するために、プログラムの段階(開始直後なのか)やプログラムが実施される文脈(プログラムの成否にかかわるコンテキスト)を明らかにすることも重要である。

以上を踏まえ本研究では、HIV 予防啓発活動を行っている CBO において核となるプログ

ラムの構造や過程、理念を記述することによってプログラム評価を行う。

## B. 研究方法

CB0 がコミュニティに対して行っている HIV 予防啓発介入活動の一部のプログラムを取り上げて、CB0 のスタッフを中心とした参加者によるワークショップを複数回実施し、プログラムの活動や目的、期待される結果などに関する議論を行った。一般的なプログラム評価論と米国 CDC の評価フレームワークを参考にしつつ、プログラムの記述にはロジックモデルをツールとして用いて議論を行った。対象 CB0 とプログラムは、2011 年度が Love Act Fukuoka (以下、LAF): コミュニティペーパー「season」(以下、「season」)(研究 1)、2012 年度が MASH 大阪: コミュニティスペース dista (以下、dista)(研究 2)、2011 年から 2013 年までが NPO 法人 akta (以下、akta): アウトリーチ活動(研究 3)であった。

プログラムのゴールは、CB0 の活動方針に基づいて、プログラムが目指す方向を提示するものであるため。ゴールそれ自体は測定可能でなくてもよく、極端に言えば必ずしも達成可能でなくても方向性が示されていれば良いとされる。一つのプログラムですべてのゴールを達成する必要はなく、一つのゴールは複数のプログラムによって達成してよい。アウトリーチプログラムに関してはゴールの構造を明確にした後、ゴールの達成に向けて、プログラムによって「対象者がどのように変化するか」をインパクト理論によって図式化した。プログラム実施によって、対象者はどのような道筋で変化を遂げて、ゴールの状態へたどり着くかを表現したものである。インパクト理論は、プログラムを実施したことによる参加者の変化の部分にのみ焦点を当て、実際にそのような変化を起こすために必要なプログラムの運営状況については、ロジックモデルでの検討課題となる。

本来のロジックモデルは、プログラムの投入資源、活動、活動の結果、短期的成果、中長期的に期待する成果に分けて考え、各要因及び要因間に存在する関係性を「もし～ならば...する」という一定の論理(ロジック)によって可視化したものである。この論理は関係者が想定する仮説で必ずしもエビデンスが伴わずとも構わない。

## C. 研究結果

プログラムの記述、3 つの CB0 の 3 つのプログラムについて、プログラムの記述による評価を行った。

研究 1: LAF: コミュニティペーパー「season」

LAF は 4 回のワークショップを経て、「season」に関するモデルを作成した。LAF の対象及び目的は、本研究が行われる以前に整理されており、HIV 新規罹患患者数の減少を目的として、HIV(STI)予防のための情報の共有、予防方法の提示、検査体制の整備を行い、セーフアセックスを選択できるための環境を作ると明記されていた。これを達成するために複数のプログラムがある。そのうちの「season」は、個人に向けて HIV/STD の共有、LAF やコミュニティセンター haco(以下、haco) の情報を提供するとともに、地元のイベント情報等を掲載している(図 1)。これによって、個人に対しては HIV/STD に関する効果的な情報提供と同時に、街の情報誌として情報を媒介する機能を併せ持ち、haco(LAF) が街の一員としての役割を示すと同時にコミュニティからの信頼を得ることができる。仮に配布を担う店舗が HIV/STD の啓発に強く賛同していなくとも、店の情報やイベント情報およびコミュニティのキーパーソンが掲載されていることにより、店の利益として配布に協力することができる。そのうちに活動内容に興味を持つあるいは客との会話に HIV/STD が出てくることによって、積極的に協力することが期待される。「season」を通して HIV や Sex に関

する話題を促すことにより、店舗内あるいはコミュニティ内の雰囲気（規範）に影響することが期待される。LAF の目標を達成するため長期的ゴールのうち、個人の知識や予防に関する認識には影響があると考えられるが、社会的な環境の変革に対しては十分な効果を持っていないと考えられる。LAF が行うアウトリーチ活動は、当該コミュニティとの信頼を含む関係性の構築と保持が活動の根幹にあることが明確になり、それを目的とする活動がアウトリーチ活動に内包されていることが記述された。

#### 研究 2: MASH 大阪: コミュニティスペース dista

dista を運営する MASH 大阪の最終的な目的は大阪地域における MSM のセクシュアルヘルスの向上である。その目的達成のために、HIV が特別と思わなくなる、コミュニティで HIV/STI の話題を話すことができるようになる、自分で考えて情報を求め得る、自分で考えて検査を受検する、自分で考えて相談する、医療や検査相談などの社会資源が身近になり利用できる、コンドームを使う、自分らしく居られる場所があることが必要であるという考えのもとに、dista を運営していることが明確になった（図 2）。dista はこれらの課題を達成するために、dista という場において信頼関係のもとに情報の整理と設置、人の配置、勉強会等の運営を行っていた。また、これまで明確でなかった「ふらっと来る人」に関してワークショップの中で言及し、誰か知り合い（スタッフ含）がいるか見に来る、休憩場所として立ち寄る、バーに行くまでの時間つぶし、待ち合わせ・待ち合わせまでの時間つぶし、誰か人がいるところにいたい、行くところがない、何かやりたいけどどうしていいかわからないといった様々な理由で気軽に立ち寄る人にとって、普通にそこにあるものとして HIV/STI の情報等を提示している

ことが明確になった。

#### 研究 3: akta: アウトリーチ活動

アウトリーチプログラムは、コミュニティセンター akta から、バーやクラブへ向けてコンドーム等の啓発資材を配布する活動を通して、HIV や性感染症、Safer Sex を身近なこととして意識してもらうことを目的としたプログラムである。アウトリーチプログラムを担うボランティアは「デリヘルボーイズ」と呼ばれる。毎週金曜日の夜に様々な人がボランティアとして集まり、楽しく参加しながら、対象区域である二丁目内にあるバーなどの店舗を訪問する。さらに、その場にいる人と会話しながら店内に設置してもらっている専用の什器にコンドーム等の資材を補充するとともに、コミュニティの状況を把握して NPO 法人 akta の活動に反映するコミュニケーション活動である。

akta は、ゲイ・バイセクシュアルをはじめとして多様な人が集まる新宿二丁目を「多様な店舗が営業するビジネスの場」、「多様なセクシュアリティを軸に人が集まる場」、「生活の場（ホーム、サークル）」、「注目を浴びる華やかな場（少し特別な場、ステージ）」であるととらえている。この理解に基づいた地域の特性を生かして、この地域の人たちの生活や文化に沿った、街になじみ、受け入れられる活動としてセクシュアルヘルスや性感染症の予防啓発活動などを展開している。アウトリーチ活動はこれらの理解に基づき、場の文化を尊重し配慮するとともに特徴を利用した活動としてコーディネートされている。

そのため akta のアウトリーチ活動では、楽しそうに活動する、あるいは周囲から楽しくみえるように演出することが非常に重要である。目に留まる活動をすることによって話題作りになり、セクシャルヘルスや HIV に関するコミュニケーションを促進することによって HIV に関する話題のタブー視を取り払うこ

とを狙っている。また、HIV 予防啓発のボランティアとしてコミュニティから「善いことをしている偉い人たち、活動している人」ととらえられてしまうことによって、新宿二丁目の文脈から外れ、特別視されてしまう。これより、コミュニティ「内」の活動というピア性が失われてしまう。そのため、新宿二丁目の街の雰囲気にも馴染んだ、遊んでいるような楽しい活動であるというように内外から感じられるように工夫をしている。また、ボランティア参加者はサークルのような楽しい活動に気軽に参加し、他の参加者とコミュニケーションすることができることで、参加を継続する動機となるばかりでなく、知り合いを気軽に HIV 予防啓発活動に呼び込むことができる。

デリヘルボーイズは新宿二丁目の「注目される華やかな場」としての文脈にあわせて、そろいの目立つユニフォームを着ることにより、活動及び akta の認知向上に役立つよう配慮されている。また、配布活動のボランティア参加者が変わっても、コミュニティ側からは同じ活動であると認知することができる。魅力的なユニフォームであることで、話題性があるとともにユニフォームをきっかけとして活動に興味をもつ人やボランティアに参加を希望する人を引き込む意図がある。

継続して定期的に街を歩き、店舗を訪れることによって、HIV/STI の問題や akta の活動を可視化し、akta の活動には主体（人）があることを印象づけ、コミュニティとの信頼関係の構築と維持をする役割を持つ。コミュニティの情報や雰囲気、akta からの資材や情報の受け入れられ方などの活動に重要な情報をリアルタイムに直接得ることができる。コミュニティ全体と akta とをつなぐ懸け橋として、双方向のコミュニケーションを行うネットワークの基盤となっている。

アウトリーチプログラムにより店舗に配布する資材の基本は、1 個ずつ包装されたコン

ドームである。バーやクラブなどの二丁目の人々にとっての日常の身近な所に、オリジナルデザインの個包装されたコンドームを店の客層によって種類を選択して配布している。

コンドームを配布するという行為は、活動開始当初は、旧来からある男女間の性行為に使う避妊具というイメージを、男性同性間の Safer sex の選択肢の一つとして必要なものというイメージに転換し、コミュニティ内でのセクシュアルヘルスに関する話題のきっかけとなり、タブー視されていた HIV に関するコミュニケーションが促進されることを目的とするものであった。しかし近年では、さらにコンドームの認知を向上させ、コンドームが日常の身の回りにあることが自然であるコミュニティの雰囲気を作るという目的へと変化している。

コンドームパッケージをはじめとした啓発資材は、デザイナーや写真家、モデルなどのコミュニティ内のキーパーソンとの協働によって開発している。これにより、対象に受け入れられ話題性のある資材の開発が可能になるとともに、店あるいは客の好みなどコミュニティ内の多様なニーズに応じた資材を作成・配布することができる。対象のニーズに合わせた資材開発は、akta の理念及び活動全般の認知向上と、akta とコミュニティとの関係性を深めることに大きく寄与しているものである。

これらの資材は原則として郵送することなく、アウトリーチプログラムを担うボランティアによって、コミュニティ内の各店舗へ手渡しで届けられ、什器に補充される。その際、店舗ごとの什器の設置場所や店舗の客層に配慮した丁寧な配布補充作業を行う態度を示すことにより、店舗の営業に配慮するとともに、akta のメッセージを具現化した大切な資材であることを伝えることができる。

アウトリーチプログラムのロジックモデルの作成に当たっては、まず NPO 組織としての

目的との対応をゴールの構造として図示した(図3)。ゴールを達成するためにプログラムで展開されている要素をモデル化して表現した(図4,5)。しかし、ここではロジックモデルの特徴である矢印が描かれていない。これは一つの活動要素が複数の短期的成果を期待しており、仮にロジックの矢印を引いたとしても複雑に交わり、見づらくなってしまふことと、プログラムリーダーらとの会合で矢印を引かないほうがモデルとして受け入れやすいとの意見を得たため、矢印での詳細な論理づけを表記しないこととした。そのため、いわゆるロジックモデルではなく、活動とゴールのプロセスをモデル化したという意味でプロセスマップという言葉を用いた。

## 2. 評価方法論の検討

CBOの活動をCDCのフレームワークを用いて記述し、活動内容を詳細に理解し、評価することが可能であった。

複雑なコンセプトを持つHIV予防介入プログラムの理論とプロセスを明らかにするために、関係者間で協議しながら記述していくロジックモデルは最適なツールであった。

## D. 考察

### 1. 評価方法論について

#### 1) プログラム評価とアカウンタビリティ

本研究において取り組んだプログラム評価は、プログラムとその効果の中間をブラックボックスにせず、視覚的に説明可能な形にするための手段である。プログラムの目的を基本に、プログラムによる対象者の変化の道筋(why)を記述し、そのような変化をもたらすためのプログラムの実践(how)を「ロジックモデル(プロセスマップ)」で表現することによって、プログラム全体の可視化につながる。これらのプロセスの可視化の作業過程において、スタッフやボランティアなどのプログラム関係者がプログラムについて互いの考えを

出し合い議論することにより、個々に考えている活動の目的や期待する成果等が記述や図として具体化される。この結果を利用して様々な問題や課題の発見、プログラム改善の方向性などを検討するが可能となり、間接的に活動をエンパワメントすることができる。具体化可視化されたプログラムの有用性は非常に高く、仮に世代や主要メンバーが交代してもプログラムの目標を維持していくことができる「記録」となるとともに、活動の効率や効果などの評価を行うための適切な評価指標(調査項目)を設定する際の根拠資料として活用することができる。また、「当事者性」あるいは「コミュニティの文化を尊重」と言った抽象的な理念概念が、どのようにプログラムの中でとして具体化されているのかについて、学ぶことができる。

また、このような手段は、無作為化比較試験などの厳格な方法論の適用が現実的でない場合に有用となるとされている。すなわち、エビデンスの提示に次ぐ「より実現可能な選択肢」としてアカウンタビリティ(説明責任)向上を目指す際に、活用されるべき手法である。

運営者、ボランティア、関係者、プログラムの対象者を含めたプログラムに関わるあらゆるステイクホルダーに対して、当該プログラムが何を指し、どのような効果が対象に現れ、プログラム全体としていかなる成果をあげているのかという点に対して、体系的なアカウンタビリティを果たすことが可能となる手段であった。

#### 2) 評価目的と積極的活用へ向けて

今回のプログラム評価の目的は、効果的なHIV予防啓発活動実施のための支援である。この意味においてエンパワメント評価という言葉を用いることもある。プログラム評価によって実践活動を記述し、図として具体化し、モデル化することによって、当該プログラム



の何が効果を生み出していたのか、あるいは改善点はどこか、他地域で同様の目的で応用する際に必ず押さえておくべき要素は何なのかといったプログラムの質向上・改善につなげる、さらには他の類似の活動との違いについて議論することが可能となる。そのためには、このプログラム評価の実施とその結果に関して、当該プログラムを行っている CBO あるいはそのスタッフが主体的に活用していくという認識を持つことが必要であり重要になる。

## 2. プログラム評価結果について

### 1) 信頼関係の重要性

活動のメッセージが対象者に届くためには、CBO としての信頼と関係性の構築がまず必要であり、それはいわゆる知名度とは別の概念である。

### 2) ピア性を維持し、信頼を保つための活動

CBO が Community-Based で活動を展開するとともに、ピア（仲間）の視点から予防啓発に取り組むためには、そのピア性の理解と維持が重要になってくる。コミュニティにいる対象が自分たちと“同じ立場の仲間”あるいは自分たちを“よく理解して共感できる人たち”であると感じることである。CBO がピア性を失うことによって、発するメッセージは伝わりにくくなるとともに、Community-Based ではなくなってしまう。

### 3) CBO の要素とその評価

CBO が CBO としての役割や効果を発揮するための要素としては、次がある。

- ◆ 当事者属性（ピア属性）とコミュニティから認識されること
- ◆ 信頼（ラポール、継続的存在であること、責任、相談対応能力）
- ◆ 対象者との関係性（発信するメッセージ、人脈、ネットワーク、文化の尊重、営業に

メリットがある、イベント性）

- ◆ 当事者的価値観や文化、センスを反映した活動の展開

- ◆ 非営利的

などが重要であることがわかる。これらが CBO の要素であり、これらの要素を満たさない場合効果的な予防メッセージが効果的に伝わらない可能性がある。そのため、CBO の存在それ自体が重要なのではなく、各種の事業などによってこれらを築き上げ維持することが、必要であり前提となる。これまでのサーベイによる結果評価報告において介入曝露群と非曝露群の分類に使用していた CBO やキャンペーンのロゴの認知と介入曝露の程度は単純な相関ではないことが推察される。コミュニティにおける CBO への信頼や人気・支持といった指標が CBO としてのそもそもの効果に反映することが推察される。プログラム評価の指標として、これらの要素を測定し、モニタリングすることは特に重要な意義があると考えられる。

当事者性をめぐる問題は様々な分野で議論があるが、MSM に訴求力のある HIV 予防啓発を行う CBO が CBO としての介入を行う上で、コミュニティから受容されるピア性の維持、信頼関係の構築と維持が基板となっていた。これらの属性は CBO が必然的にかつ永続的に有するものではなく、活動やメッセージの押しの強さとのバランスの中で、展開するメッセージやビジュアルあるいはブランディングといった活動の中に意図し、アピールすることによって、これを維持することが重要であることが明らかになった。これに失敗するあるいは怠ると、CBO といえどもコミュニティから途端にアウトサイダーとして見られ、Community-Based ではなく単に Located organization となり、その最大の特徴であるメッセージの訴求力を失う可能性があることが推察された。

### 3. 課題

継続的なロジックモデルの作成や見直しと同時に、当該 CBO が自ら利用したいと感じられるレベルのモデルや記述の作成が必要である。さらにはモデルを用いて、活動の意図や効果を適切に反映する効果評価指標づくりを進め、その指標によるモニタリング調査が必要となる。

コミュニティセンター間の有益な議論の材料として活用するためには、多地域で共通すると考えられる活動に関するモデル作成を促進する必要がある。

先行研究にはここまで詳細かつ複層的なモデルの構築や活用事例の報告がないため、作成方法、表現方法及び活用方法にはさらに独自の工夫を要する。また、エンパワメント評価の立場からは、ロジックモデルの構築過程の議論や参加者の考えの変化あるいはその後の行動の変化が評価研究の成果の重要な一部であるとされるため[Fitterman.MD, 2005]、これらを適切に記述することができるよう、討議の内容や参加者の振り返りを記録していく必要がある。

また、複数のプログラムが相互に補完しあいながら機能していると考えられるため、関係する他のプログラムのモデルを並行して構築し評価することによって、関係性と役割が明確になると考える。

### E. 結語

CBO による HIV 予防啓発の評価は、HIV 罹患率の減少や AIDS 報告数の減少といった長期的な中長期的な成果を待つ前に、プログラムの体系的な理解と、それによる活動プロセスの評価指標により、プログラムプロセスをモニタリングし、より効果的なプログラムへと迅速に改善をしつつ進めていく必要がある。

MSM に訴求力のある HIV 予防啓発を行う CBO が CBO としての介入を行う上で基板となるピア性の維持、信頼関係の構築と維持など、プ

ログラム評価かわかることを評価に加え、HIV の予防という全体の目標に寄与する活動の改善と促進が望まれる。

### F. 発表論文等

( 印は当研究班に関連した発表論文等 )  
(論文)

1. 松高由佳, 古谷野淳子, 桑野真澄, 橋本充代, 本間隆之, 山崎浩司, 横山葉子, 日高庸晴: Men who have Sex with Men (MSM) における感染予防行動を妨げる認知に関する検討, 日本エイズ学会誌, 15(2), 134-140, 2013

(学会発表)

1. 日高庸晴, 本間隆之: インターネットによる MSM の行動疫学調査-経年変化分析の結果-, 第 25 回日本エイズ学会学術集会・総会, 東京, 2011

### G. 引用文献

□ Aral SO. (2008). Behavioral intervention for prevention and control of STD. Springer.

□ Bickman L. (1987). The function of program theory using program theory in evaluation. San Francisco: Jossey-Bass.

□ CDC. (2011). Introduction to Program Evaluation for Public Health Programs: A Self-Study Guide, 参照先: <http://www.cdc.gov/eval/guide/>

□ CDC. (2002). 参照先: Evaluation Guidance Handbook: Strategies for Implementing the Evaluation Guidance for CDC-Funded HIV Prevention Programs: 参照先: [http://www.cdc.gov/hiv/topics/evaluation/health\\_depts/guidance/strat-handbook/pdf/guidance.pdf](http://www.cdc.gov/hiv/topics/evaluation/health_depts/guidance/strat-handbook/pdf/guidance.pdf)

□ CDC. (2007). 参照先: Evaluating

- CDC-Funded Health Department HIV Prevention Programs: [http://www.cdc.gov/hiv/topics/evaluation/health\\_depts/guidance/](http://www.cdc.gov/hiv/topics/evaluation/health_depts/guidance/)
- ChapelJ.Thomas. (2008). From Data to Action: Integrating Program Evaluation and Program Improvement. 著 : AraIO.Sevgi, DouglasM. (Eds.)John, Behavioral intervention for prevention and control of STD (ページ: 466-481). Springer, 2008.
  - Chen&Rossie. (1983). Evaluating with sense:the theory driven approach. Evaluation review, 283-302.
  - ChenH. (2005). Practical program evaluation: Assesing and improving planning implementation and effectiveness. Thousand Oak,CA: Sage.
  - HTChen. (2002). Ddesigning and conducting participatory outcome evaluation of community-based organizations' HIV prevention Program. Aids education and prevention, 18-26.
  - J SWholey. (2010). Handbook of Practical Program Evaluation, 3ed. Jossey-Bass.
  - KnowltonWL. (2009). The logic model guide book; Better strategies for great results.
  - PainterTM. (2010). Strategies used by community-based organizations to evaluate their locally developed HIV prevention interventions: Lessons learned from the CDC's innovative interventions project. AIDS Educ Prev.Oct;22(5), 387-401.
  - PH Rossi 大島巖(監訳) . (2005). プログラム評価の理論と方法: システムティックな対人サービス政策評価の実践ガイド. 東京: 日本評論社.
  - SA Kaplan. (2005). The use of logic models by community-based initiatives. Evaluation and Program Planning, 167-72.
  - SmithMF. (1989). Evaluability assessment: A practical approach. Norwell,MA: Academic publishers.
  - TMPainter. (2010). Strategies used by community-based organizations to evaluate their locally developed HIV prevention interventions: Lessons learned from the CDC's innovative interventions project. AIDS Educ Prev.Oct;22(5), 387-401.
  - United Way of America. (1996). Mesuring program outcome: A practical approach.
  - W.K.Kellogg Foundation. (2001). The logic model development guide.
  - WholeyJS. (1979). Evaluation: promise and performance,. The urban institute.
  - 安田&渡辺. (2008). プログラム評価研究の方法(臨床心理学研究法 第 7 巻) . 東京: 新曜社.
  - 安田節之. (2011). プログラム評価; 対人・コミュニティ援助の質を高めるために. 東京: 新曜社.

図 1. コミュニティペーパー「season」のロジックモデル

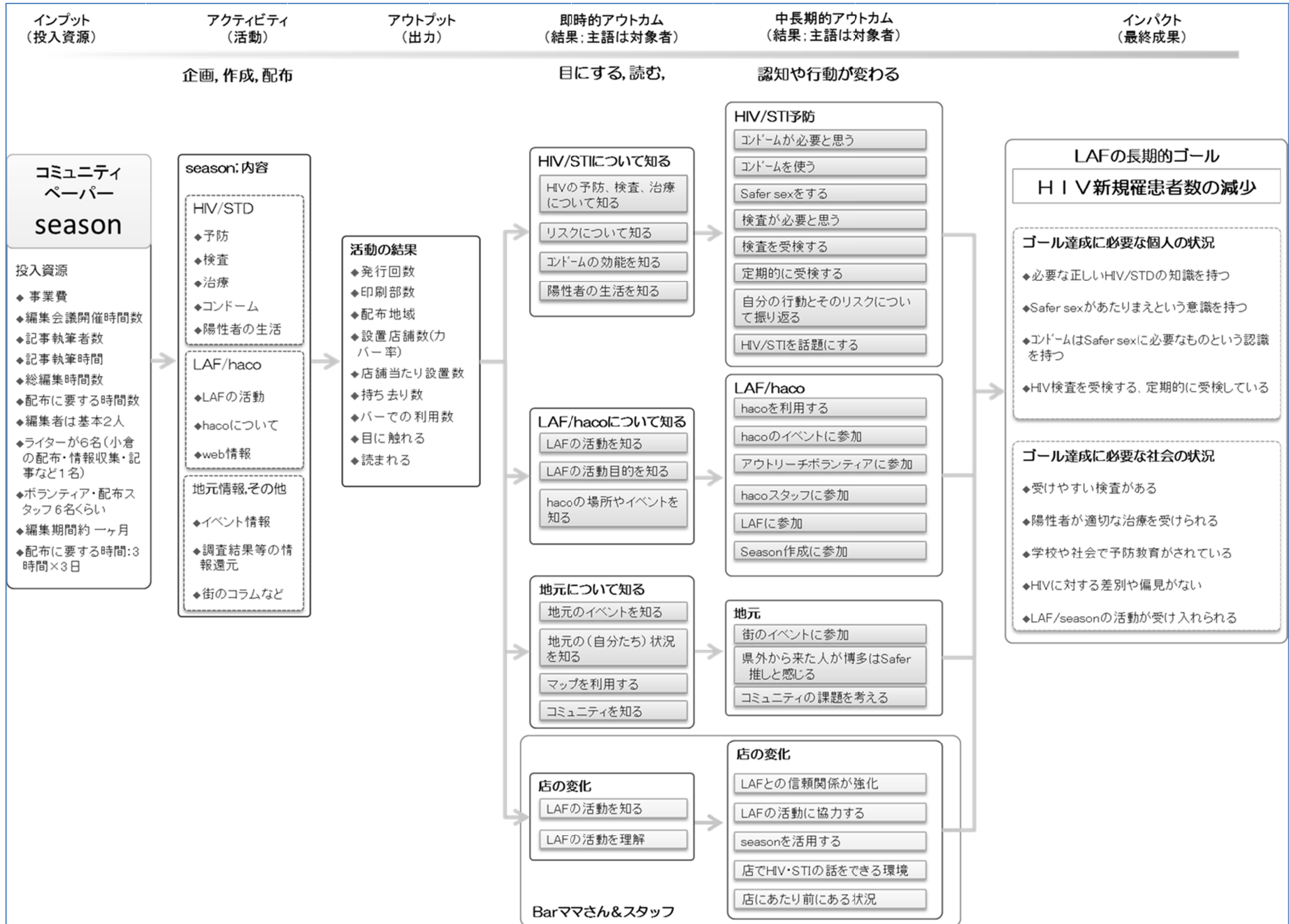


図 2. MASH 大阪コミュニティセンター事業のロジックモデル

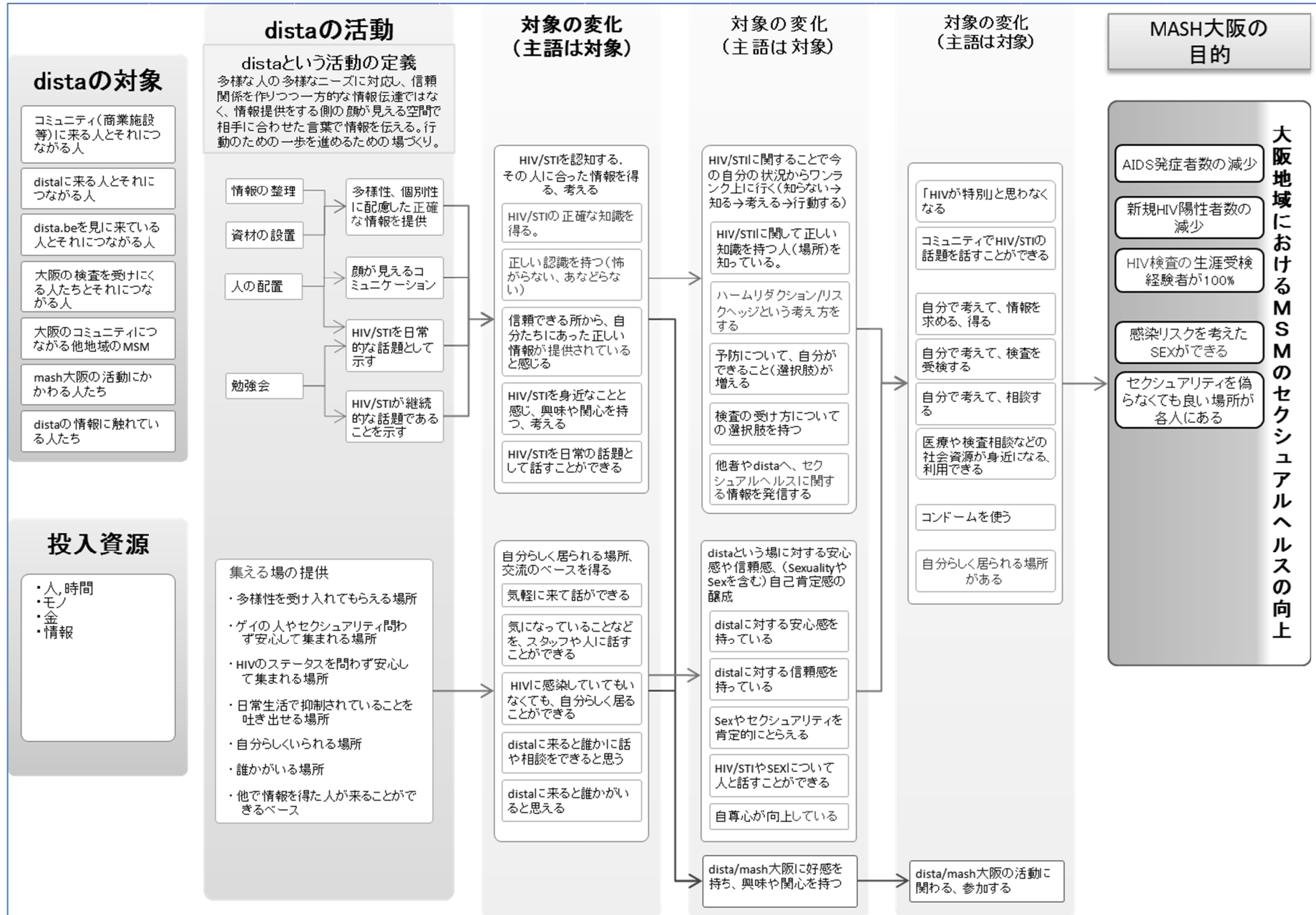
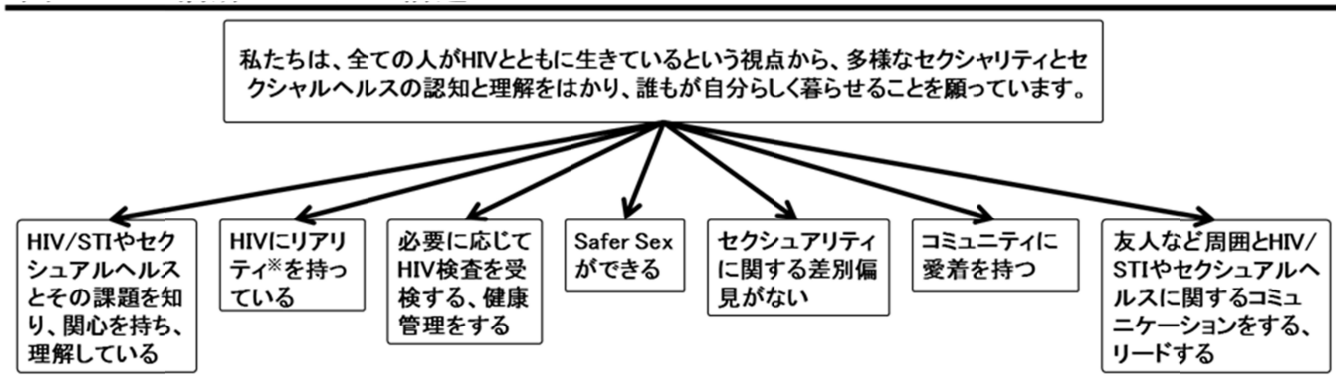
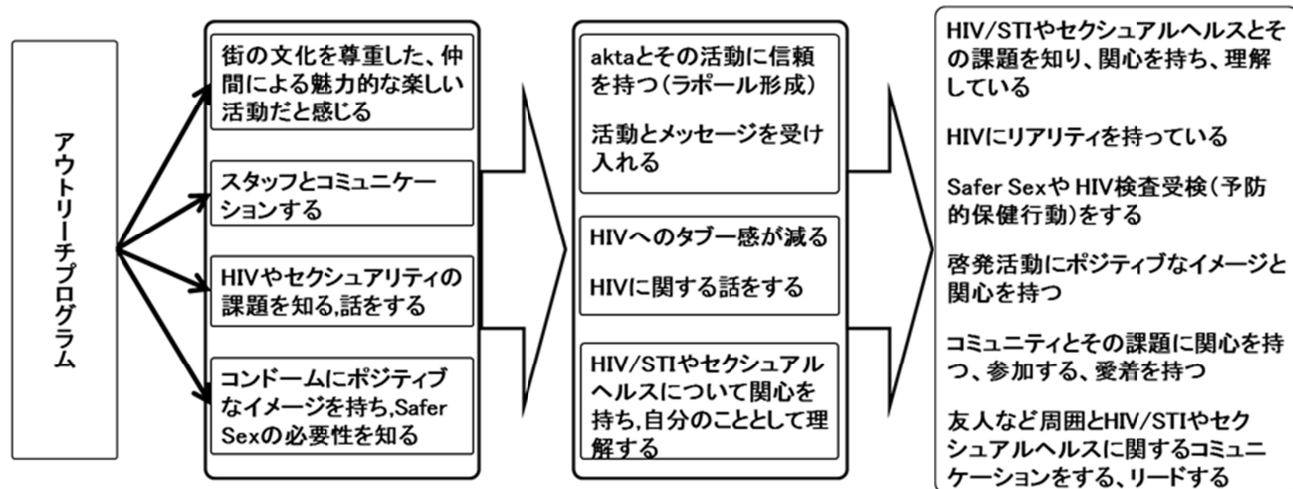


図 3.akta の活動のゴールの構造



※「リアリティ」とは、「どこか遠くの自分が属さない別の世界の話ではなく、自分の属するコミュニティで身近に起きている現実であり、自分自身に関わること」

図 4.アウトリーチプログラムのシンプルなプロセスマップ (ロジックモデル;インパクト理論)



アウトリーチプログラムの大枠の概念(インパクト理論)では、コミュニティの人、店のスタッフ、ボランティアいずれの対象に関しても同じことを期待している。つまり、セクシュアルヘルスに関して正しい知識と関心を持ち、HIVタブー視せず、適切な予防行動を実践し、コミュニティの中でその理念を広げていけるような人になることを期待している。これらの基盤となる必要かつ正しい情報は、情報源であるaktaに対するラポールがあってはじめて受け入れられる情報としてコミュニティに存在し、浸透することができる。

図 5. アウトリーチ活動の詳細なプロセスマップ (ロジックモデル)

